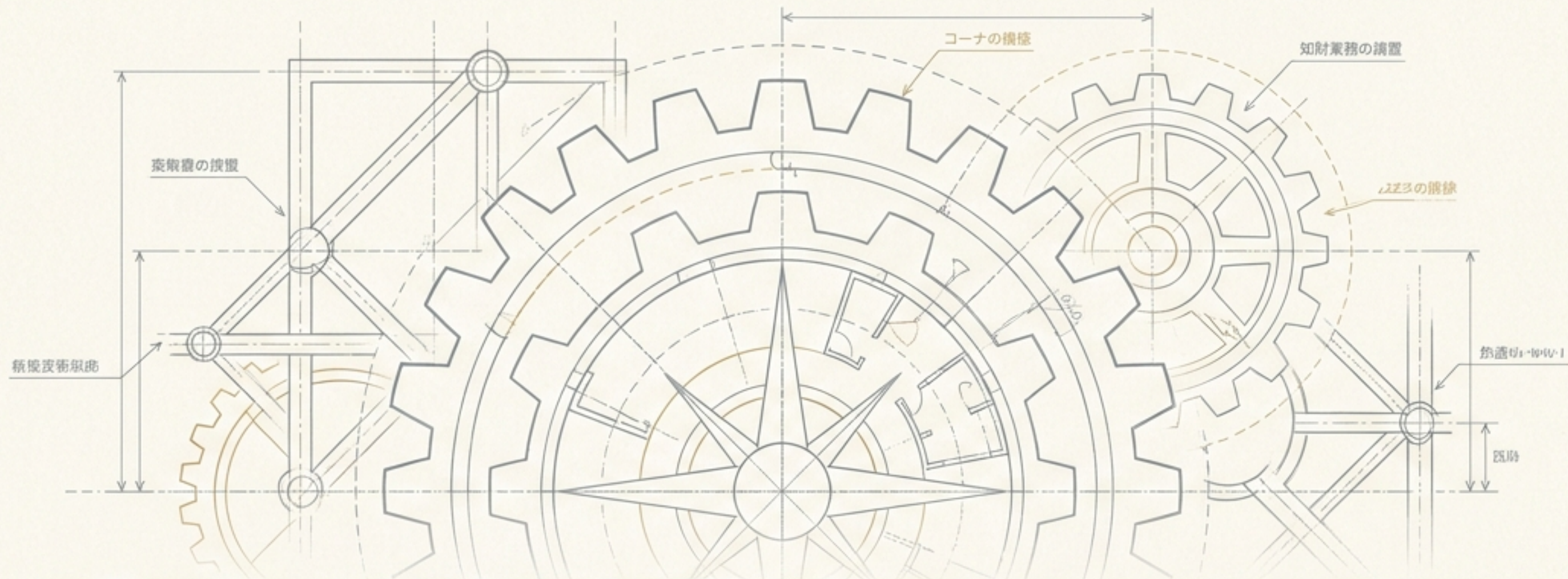


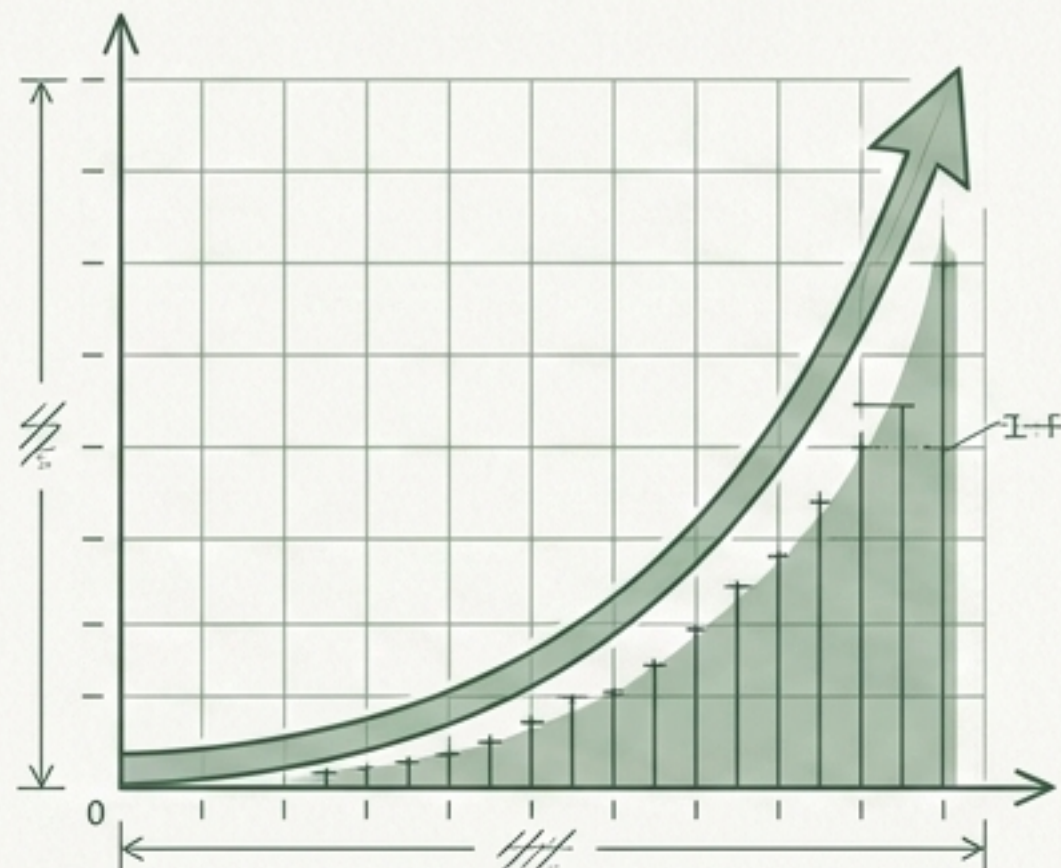


AI時代の知財業務アーキテクチャ

単なる自動化から脱却する「**Can** / **Trust** / **Own**」委任フレームワーク

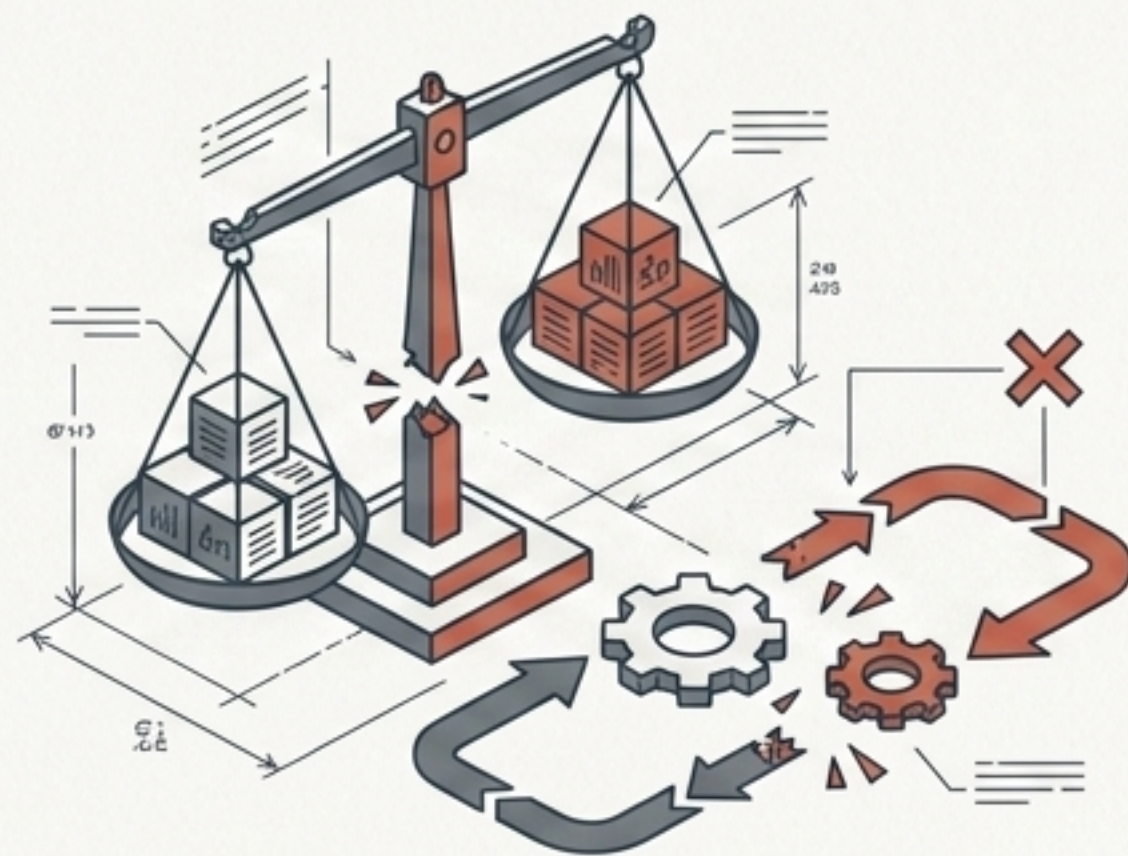
次世代の知財プロフェッショナルに求められる戦略的コントロール

The Promise 劇的な効率化の実現



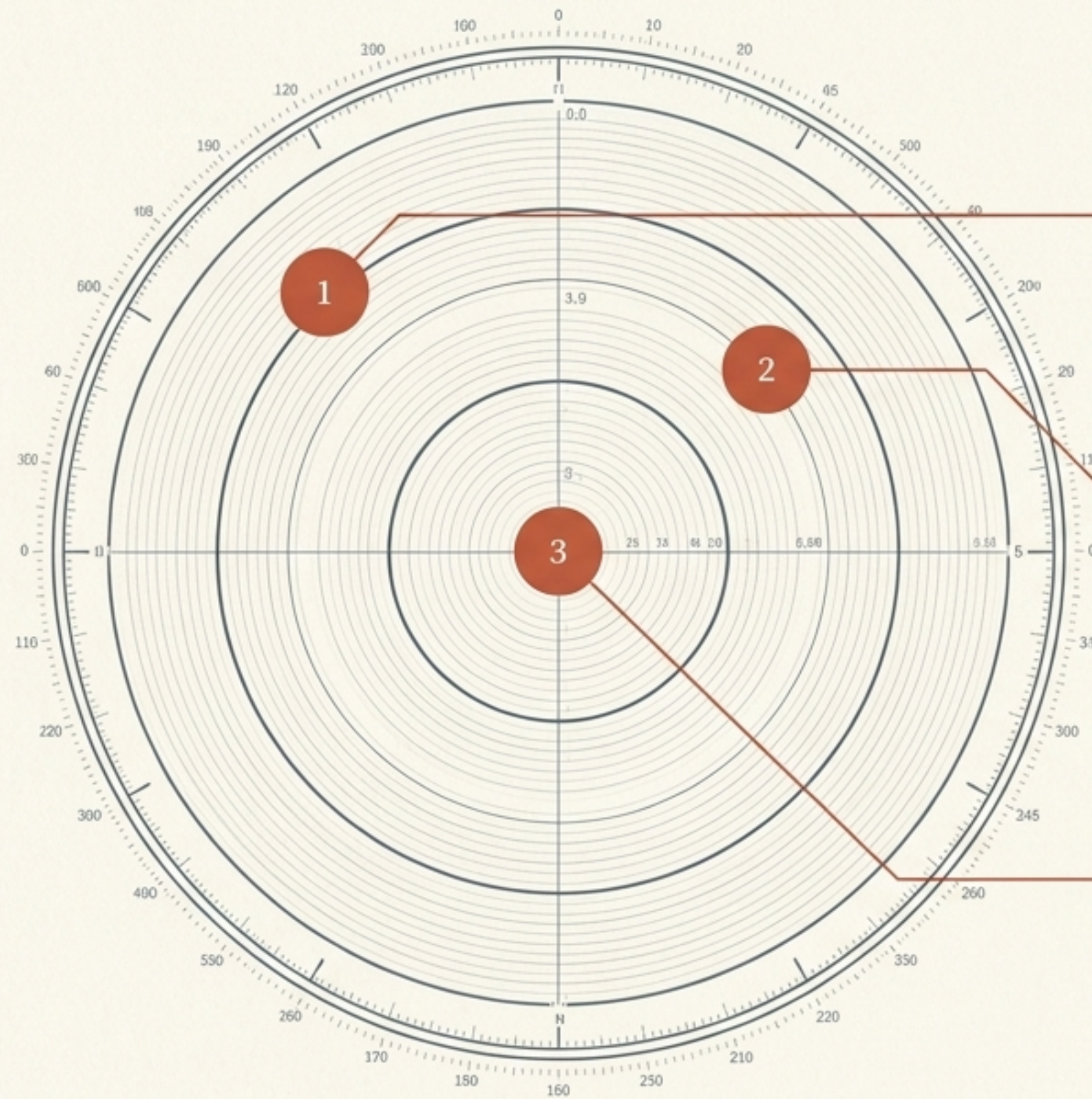
AIによる特許調査、商標類否判断、IPランドスケープ作成における「人間の処理能力を凌駕するスピードと精度」。

The Reality 「精神論」によるガバナンスの限界



「最後は人間が確認する」という抽象的なルールだけでは、実務の現場で境界線が曖昧に。知財という高度な経営判断において、致命的な欠陥となる。

AIへの依存度が高まる中、単なる「道具の導入」ではなく「委任の設計」が急務である。



ハルシネーション（もっともらしい虚偽情報）

米国ではAIが捏造した架空の判例をそのまま裁判所に提出した弁護士が制裁を受ける事件が発生。

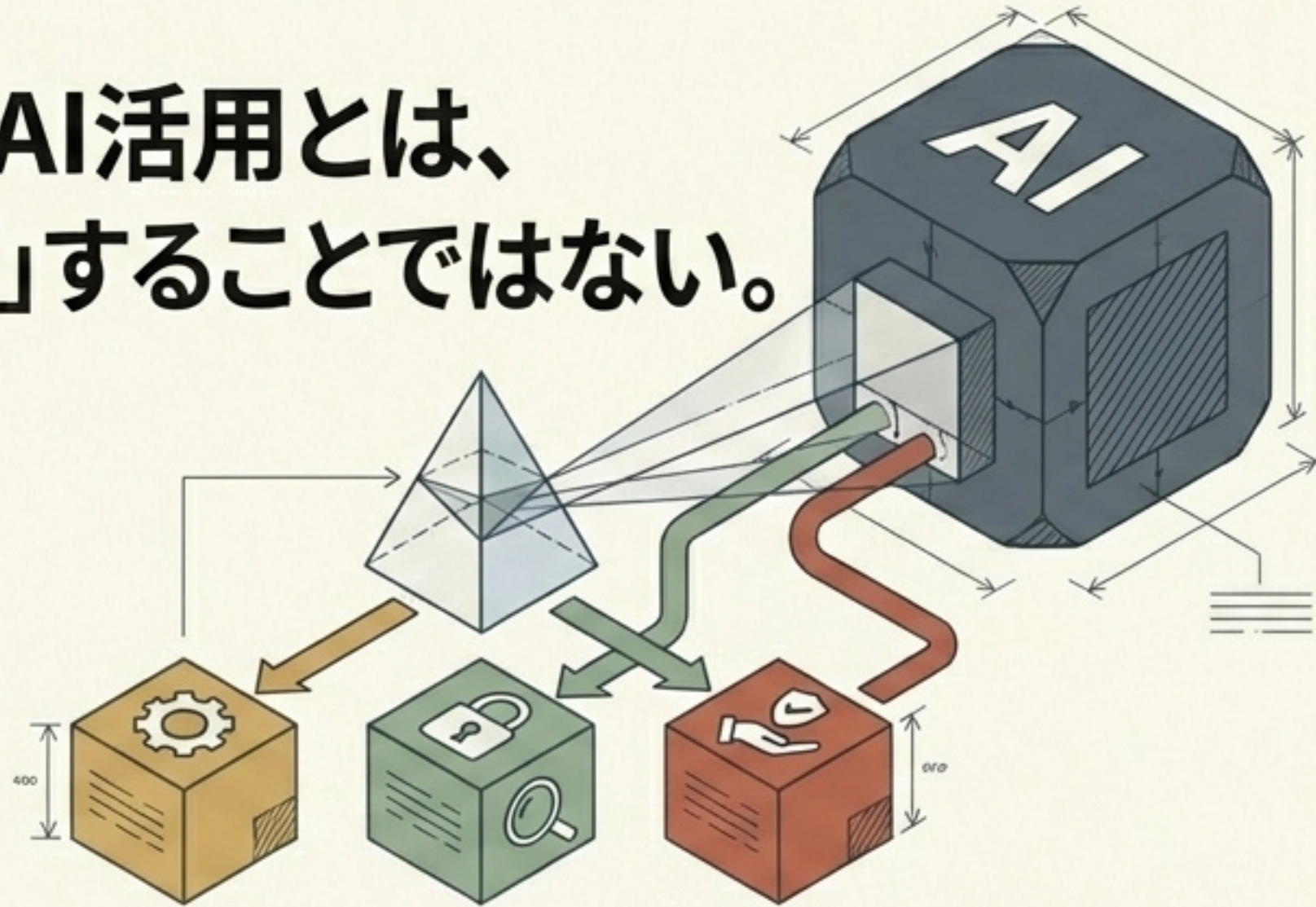
新規性の喪失

外部AIへの未公開発明の入力による、特許要件（新規性）の致命的な喪失リスク。

情報漏洩とコンプライアンス

企業の競争力の源泉である営業秘密の流出。企業の存続を揺るがす重大事態。

知財業務におけるAI活用とは、 AIに判断を「丸投げ」することではない。



知財判断のプロセスを分解し、3つの評価軸で『任せられる範囲』を戦略的に設計することである。



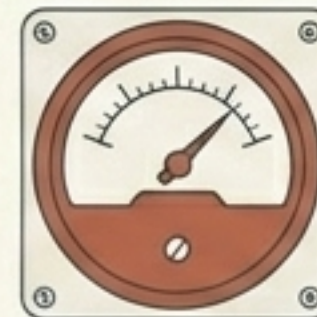
Can (能力・適合性)

AIの技術的・法的な文脈の
理解力



Trust (信頼性・検証可能性)

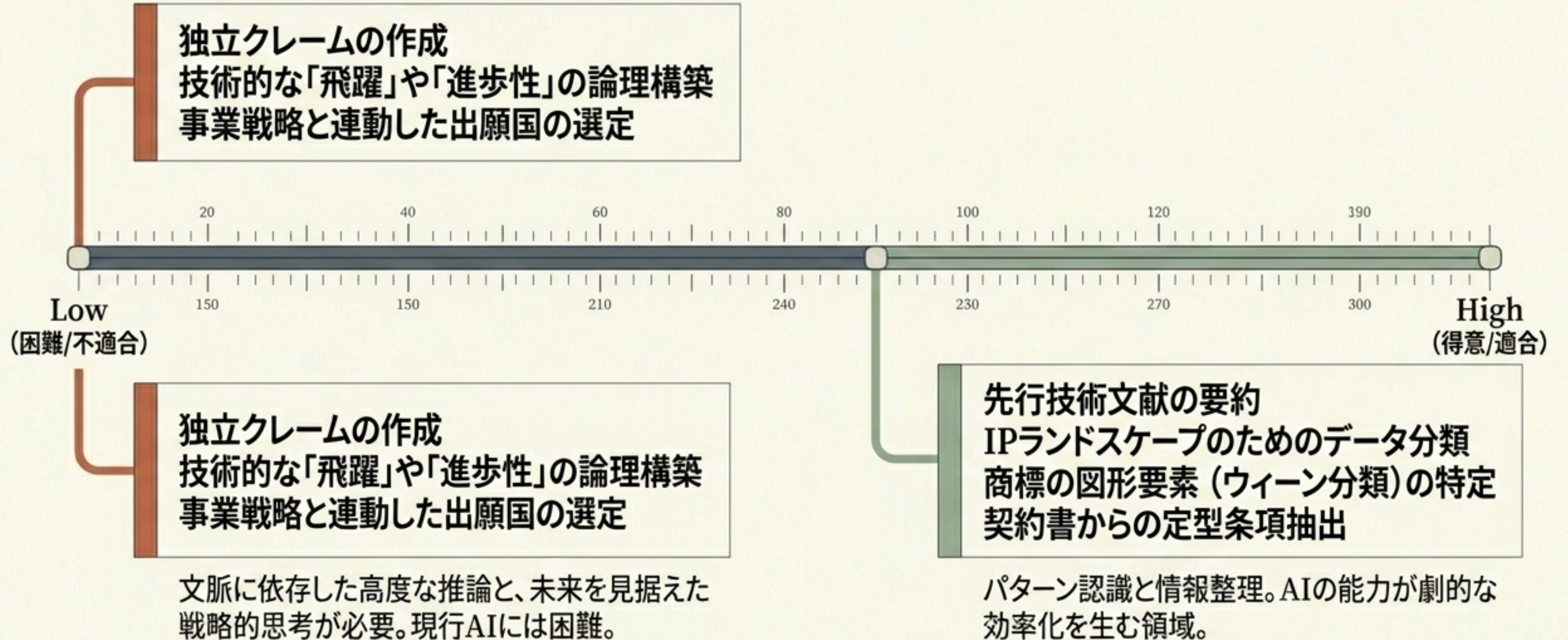
出力結果の正しさを人間が
合理的に検証できるか



Own (責任・権利帰属)

その判断がもたらすリスクと
リターンの責任の所在

Can (能力・適合性)



Trust (信頼性・検証可能性)

Low Trust / 検証困難 - High Cost

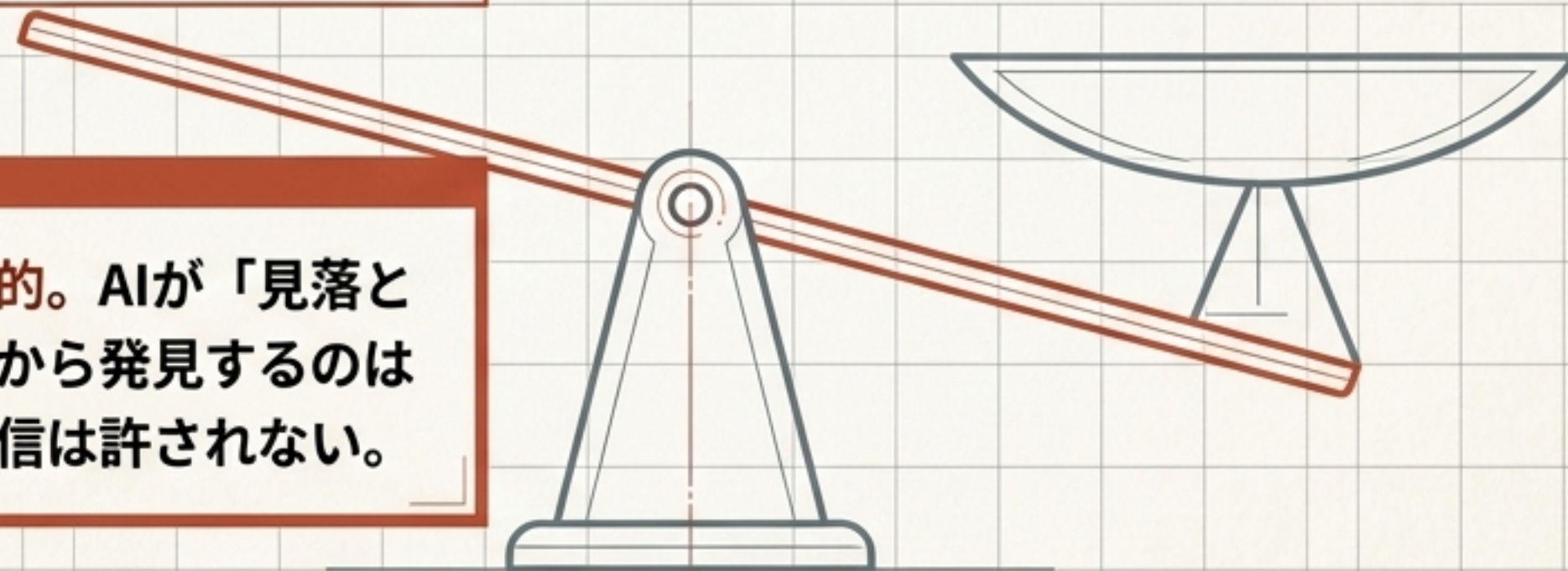
- 「侵害リスクなし (FTOクリア)」
という消極的事実の証明
- 高度専門分野の先行技術の網羅的調査

自動化への過信は致命的。AIが「見落とした」ものを人間が後から発見するのは極めて困難であり、盲信は許されない。

High Trust / 検証容易 - Low Cost

- 抽出された検索キーワードの確認
- 翻訳の一次チェック
- 形式的な期限管理

元データとの照合が容易。誤りが視認しやすい。



Own (責任・権利帰属)



【権利帰属の境界線】

日本の裁判所 (東京地裁令和6年5月16日判決) においても、「発明者は自然人に限られ、AIは発明者になり得ない」と判示。法的に人間が主体となる必然性が裏付けられている。

AIエージェント時代の知財業務設計：委任レベルの定義とC/T/Oプロファイル

(AI Delegation Levels: Definitions and Can/Trust/Own Profiles)

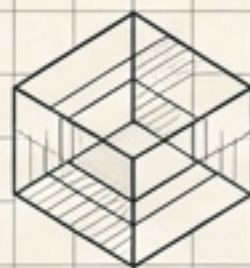
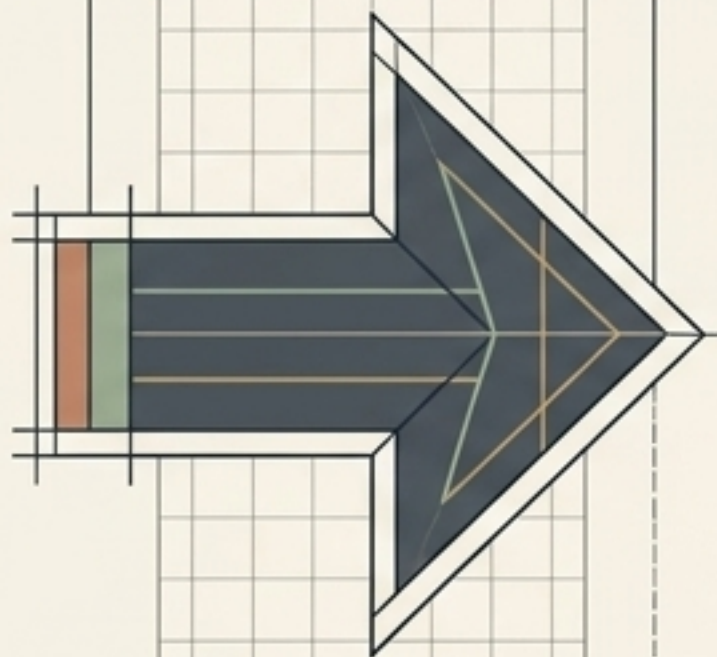
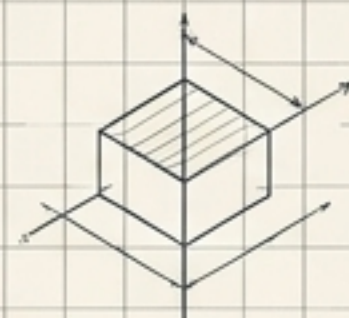
レベル	C/T/O プロファイル	設計指針	業務例
Level 1: 完全人間主導 (Human-Led)	 Can (能力) Trust (信頼性) Own (責任)	AIは情報提供のみ。人間が100%の責任と決定権を持つ。	知財戦略立案、侵害最終判断、独立クレーム確定。
Level 2: AI支援・人間主導 (AI-Assisted, Human-Led)	 Can (能力) Trust (信頼性) Own (責任)	AIがドラフト提示。人間が文脈に沿って必ず修正・承認する。	従属クレーム作成、明細書初稿、IPランドスケープ示唆出し。
Level 3: AI主導・人間検証 (AI-Led, Human-Verified)	 Can (能力) Trust (信頼性) Own (責任)	AIが自律進行。人間が最終のサニティチェックを行いリリース。	先行文献一次スクリーニング、商標類似検索（一次）。
Level 4: 自動化 (Automated)	 Can (能力) Trust (信頼性) Own (責任)	AIに完全委任。例外発生時のみ人間に通知。	期限管理アラート、公開情報のデータクレンジング。

過去～現在：オペレーター

情報検索、定型文案の作成といった
「作業スキル」。

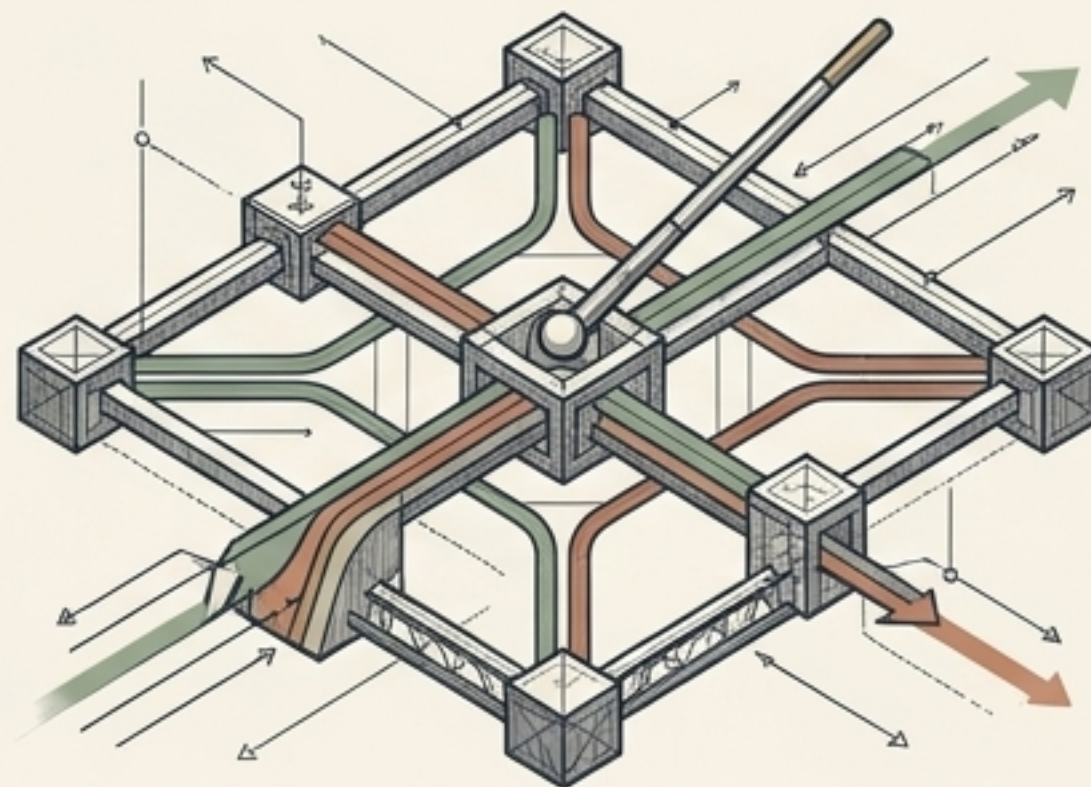


AIを「道具・作業者」として利用、
またはAIに仕事を奪われるという恐れ。



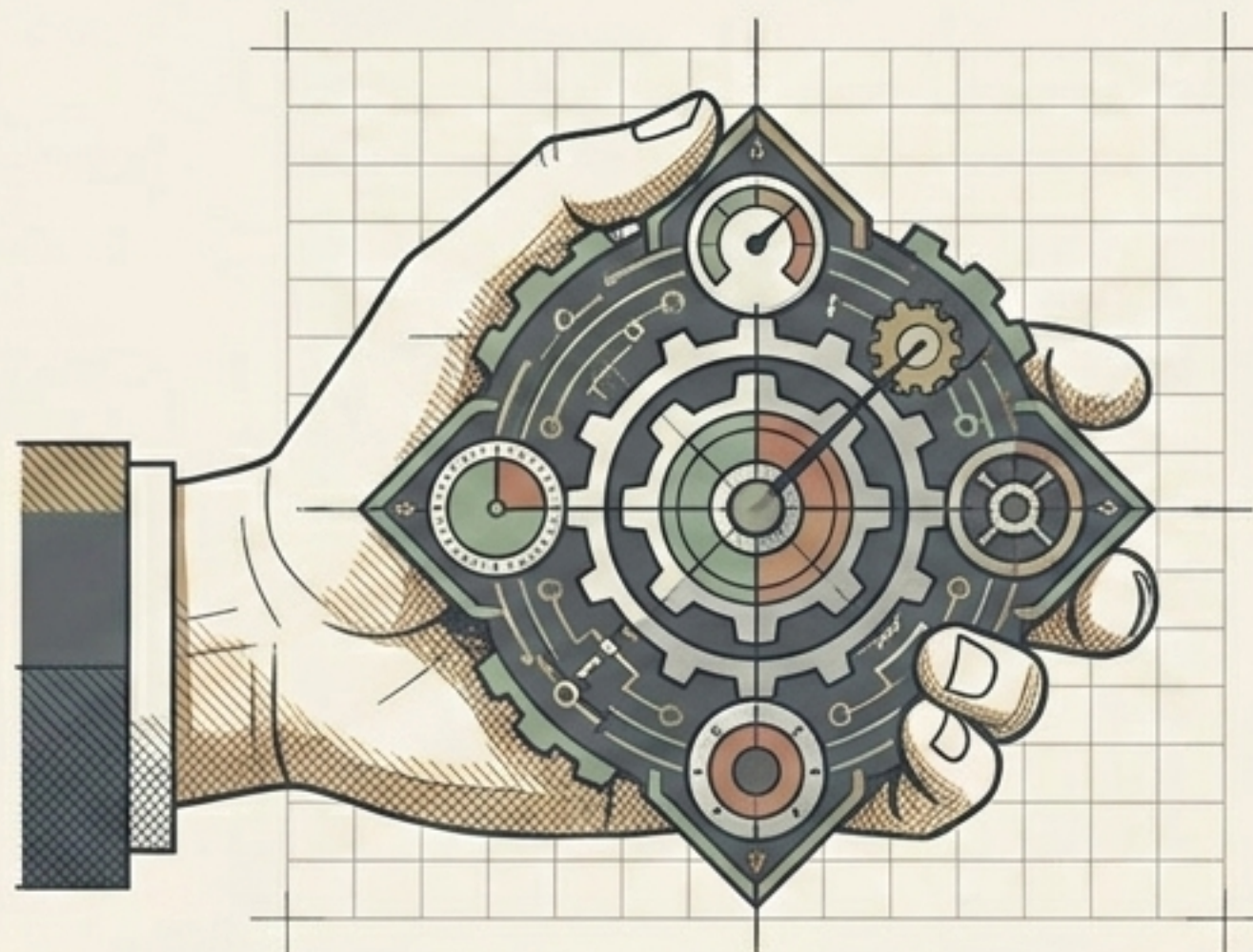
次世代：オーケストレーター

AIの分析をビジネス戦略と照らし合わせて評価。
リスクをコントロールし最終決断を下す
「判断力」と「オーケストレーション能力」。



Can/Trust/Ownを用いて
「任せられる範囲」を戦略的に設計・指揮する。

「AIを恐れるのではなく、委任を設計せよ。」



知財という企業のコア競争力を扱う領域において、最終的な判断をAIに委ねることはできない。
AIの能力（Can）を引き出し、検証可能性（Trust）を担保し、核心（Own）を人間が握る。
このプロセス設計こそが、次世代の知財部門における最大の競争源泉となる。